

「献舍人皇子歌」と「舍人皇子御歌」（万葉集巻九）覚え書き

* 本 田 義 寿

〔一〕

① 献舍人皇子歌二首

妹が手を取りてひきよぢふさ手折り我がかざすべく花咲けるかも
(9・一六八三)

春山は散り過ぎぬとも三輪山はいまだふふめり君待ちかてに(9・一六八四)

② 献舍人皇子歌二首

ふさ手折り多武の山霧しげみかも細川の瀬に波のさわける(9・七〇四)

冬こもり春へを恋ひて植ゑし木の実になる時をかた待つわれぞ
(9・一七〇五)

③ 献舍人皇子歌二首

たらちねの母の命の言にあらば年の緒長く頼み過ぎむや(9・七七四)

泊瀬川夕渡り来て我妹子が家のかなとに近づきにけり(9・一七七五)

万葉集巻九の「柿本朝臣人麻呂之歌集」(以下「人麻呂歌集」と略)所出の「献舍人皇子歌」である。その舍人皇子にかかわって、

④ 舍人皇子御歌一首

ぬばたまの夜霧は立ちぬ衣手の高屋の上になびくまでに(9・一七〇六)

というのがあり、①②④は雑歌、③は相聞となっている。また人麻呂歌集所出ではないが巻一六の有由縁并雑歌に

⑤ 無心所著歌二首

我妹子が頼に生ふる双六のことひの牛の鞍の上の瘡(16・三三三八)
我が背子がたふさぎにするつぶれ石の吉野の山に氷魚そさがれる
(16・三三三九)

右歌者舍人親王令侍座曰、或有作無所由之歌人者、賜以錢帛、于時大舍人安倍朝臣子祖父、乃作斯歌献上。登時以所募物錢二千文給之也。

とあり、舍人親王(舍人皇子)に「献上」されたとみえる。

万葉集中にはその舍人皇子に献ぜられた歌だけでなく、他にも献ぜられた例がみえる。題詞あるいは左注に「献」(献歌・献上・奉献など)とある例は次のとおりである。

- ⑥ 天皇遊獵内野之時 中皇命使間人連老献歌(1・三、四)
- ⑦ 柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌(2・一九四、一九五)
- ⑧ (同右左注)右或本日 葬河嶋皇子越智野之時、献泊瀬部皇女歌也…(略)…
- ⑨ (天皇御遊雷岳之時 柿本朝臣人麻呂作歌一首の左注)右或本云 献忍壁皇子也…(略)…(3・二三五)
- ⑩ 柿本朝臣人麻呂献新田部皇子歌一首并短歌(3・二六一、二六二)
- ⑪ 八代女王献天皇歌一首(4・六二六)
- ⑫ 献天皇歌一首(大伴坂上郎女在佐保宅作也)(4・七二二)
- ⑬ 献天皇歌二首(大伴坂上郎女在春日里作也)(4・七二五、七二六)
- ⑭ (好去好来歌一首反歌二首の左注)天平五年三月一日良宅对面献三日 山上憶良…(略)…(5・八九四、八九六)
- ⑮ 冬十二月十二日 歌儼所之諸王臣子等集葛井連広成家宴歌二首 比来古儼盛興 古歳漸晚 理宜共尽古情同唱古歌 故擬此趣輒献古曲二節 风流意气之士 儻有此集之中 争発念心々と古体(6・一〇一一、一〇一二)
- ⑯ 献忍壁皇子歌一首(八詠仙人形)(9・一六八二 人麻呂歌集)
- ⑰ 献舍人皇子歌二首(9・一六八三、一六八四 人麻呂歌集)
- ⑱ 献弓削皇子歌三首(9・一七〇一、一七〇三 人麻呂歌集)
- ⑲ 献舍人皇子歌二首(9・一七〇四、一七〇五 人麻呂歌集)
- ⑳ 献弓削皇子歌一首(9・一七〇九 人麻呂歌集)
- ㉑ 献弓削皇子歌一首(9・一七七三 人麻呂歌集)
- ㉒ 献舍人皇子歌二首(9・一七七四、一七七五 人麻呂歌集)
- ㉓ (左注)右伝云 時有所幸娘子也 寵薄之後還賜寄物 於是娘子

怨恨 聊作斯歌献上(16・三八〇九)

⑳ 献新田部親王歌一首(八未詳)(16・三八三五…略…尔乃婦人作此戲歌 專輒吟詠也)

㉑ 無心所著歌(の左注)↓㉑ (冬日幸于輒負御井之時 内命婦石川朝臣忠詔賦雪歌一首の左注) 于時 水主内親王寢膳不安累日不参 因此日太上天皇勅侍婦等曰

為遣水主内親王賦雪作歌奉献者 於是諸命婦等不堪作歌 而此石川命婦独作此歌奏之(20・四四三九)

以上のように⑥、⑭の二十一例が認められる。その中で⑧の例は⑦の例の「或本日」である点からは、大体二十例としてもよいであろう。それらの中で、十例が柿本人麻呂の作歌あるいは人麻呂歌集所出の例であることは注目に価する。しかもその中で⑨の例が題詞に「天皇御遊雷岳之時」とあり、左注に「献忍壁皇子」(3・二三五)とある疑問を除けば、他の九例はすべて皇子皇女に「献」せられているのである。その中で七例が巻九に集中する。忍壁皇子に一例、舍人皇子に三例、弓削皇子に三例がそれであり、それぞれに問題を含んではいないが、舍人皇子については「無心所著歌」(16・三八三八、三八三九、㉑)の左注にみえるように、遊戯的に歌を作ることに懸賞をつけたりすることがみえて、他の皇子とはやや異った側面が認められる。小考はそういうことを手がかりにすれば、「献舍人皇子歌」とある歌群の背景がおぼろげながらもみえてくるのではないかと思つた、その覚え書きである。

〔二〕

舍人皇子是天武天皇和新田部皇女との間に生まれた皇子(天武紀二年)であり、新田部親王とともに皇太子を輔佐(元正統紀養老三年一〇月)、また日本紀編纂の総裁ともいうべき地位(養老四年五月)にあった。こ

これらのことは舍人皇子の日常の周辺を推測する手がかりとなるであろう。新田部親王との関係は「献新田部親王歌一首（未詳）」（16・三八三五^②）

勝間田の池はわれ知る蓮なし然言ふ君が鬚なきごとし
とありその左注に、

右或有人聞之曰 新田部親王出遊于堵裏御見勝間田之池感緒御心之中 還自彼池不忍怜愛 於時語婦人曰 今日遊行見勝間田池 水影濤々蓮花灼々 何怜断腸不可得言 尔乃婦人作此戯歌 専輒吟詠也

とあるような、「戯歌」を楽しむことのできる人々との関係でもあったことを暗示する。そのことは舍人皇子が「無心所著歌」に懸賞をつけたことも無縁ではないであろう。また日本紀編纂の総裁であったという点からは、善言集とでもいうべき、日本紀の資料となったであろう稿本を通覧したであろうことも推測できる。その善言集の稿本が志貴皇子を筆頭とする「撰善言司」（持統紀三年六月）の編集によるものであることを思えば、伝承が単に言語詞章だけのものではなく、劇的所作と融合した伝承として芸術的に整序されていたであろうことも考えられる。そういう点からすれば舍人皇子の日常の周辺には、遊戯的な側面や芸術的な側面がごく身近にあったと考えてよいであろう。しかも舍人皇子の父天武は、

・所部の百姓の能く歌ふ男女、及び侏儒・伎人を選びて貢上れ。
（天武紀四年二月）

・天皇試に鼓吹の声を発したまふ。仍りて調へ習はしむ。（同一〇年三月）

・種々の楽を奏す。（同一〇年九月、一二年七月）
・小墾田儻及び高麗・百濟・新羅、三国の楽を庭の中に奏る。（同

一二年正月）

・鼓吹を発して葬る。（同一二年六月）

・凡そ諸の歌男・歌女・笛吹く者は、即ち己が子孫に伝へて、歌笛を習はしめよ。（同一四年九月）

・倡優等に禄賜ふこと差有り。亦歌人等に袍袴を賜ふ。（朱鳥元年正月）

等の記事にみえるように、歌舞音曲等の芸能を奨励育成した天皇であった。そうみると舍人皇子が「無心所著歌」に懸賞をつけたことも唐突ではないといえるであろう。その一方では日本紀編纂の重任を成し遂げているのである。遊戯性は遊戯性とし、芸能性は芸能性として截然と意識的に区分されていたであろうことも想像に難くない。人麻呂歌集所出「献舍人皇子歌」は、そういう舍人皇子に献ぜられているのである。

その他の「献」せられた歌の場合も、多くは遊戯的・芸能的な様相を含んでいるともいえるであろう。小島憲之博士が万葉集における戯歌や巻十六の「あそびの文字」にふれて、

萬葉文學の史的流れよりみて、戯歌が個人より相互関係へ、更にまた文學集團の座へと流れてゆく點に、その文學的展開をみるものと云へる。⁽²⁾

と述べておられることも、「献新田部親王歌」（16・三八三五）などを含んで今の場合にあてて考えることができるであろう。

あしひきの山にし居れば風流なみ我がするわざをとがめたまふな
（4・七二一、^③献天皇歌、大伴坂上郎女）

ともあるように、「献」は「風流」ともかわるのである。この歌について澤瀉久孝博士が「天皇に對する親愛感と率直な表現がさすがに萬葉らしくてよい」と述べておられるように、「親愛感」を「風流」

によって象徴的に表現するところに、「献」の実体があったとも考えられよう。人麻呂が天皇ではなく皇子皇女にのみ「献」じたのも、そういう親愛感とかかわるのであろうか。現実を現実として写實的に表現すればよいというのではなく、そこに「風流」を重ねることによって「献」ずる歌となり得たのであろう。「歌御所之諸王臣子等集葛井連広成家宴歌」(6・1011、1012、⑤)にもみえるように、「歌御所之諸王臣子等」、「風流意気之士」が「古舞」「古歌」にかかわり「古体」に和しているのである。古舞・古歌のままではなく、宴における風流なるものとして古体に和したはずなのである。「古曲二節」を「献」じたという場合は、小島博士の述べておられるような、文学的集団の座における文学的展開を必然とした場であつたに違いない。しかもなおそこには「風流なみ我がするわざ」とある「風流」ある「わざ」や、「風流意気之士」の歌舞などの法的な様相も必然的に重なるのである。

そういう見方をすれば「天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老献歌」(1・三、四⑥)も、雄略と袁村比売の伝承にみえる原歌謡(記・志都歌)の祝祭にかかわる舞唱曲の印象を含みつつ、ある象徴的な香気を持ち、本出義憲が指摘したように「長歌の宿命である形式を充たした美しさ」を持つがゆえに、反歌の母音のひびきの快さをも重ねて「献歌」であり得たといえるであろう。中皇命についてはさたかでないにしても、中皇命と天皇という関係は、人麻呂と天皇との関係には認められない親近感を含むであろう。その関係もまた歌を「献」ずるという条件にかかわっていたように思われるのである。

「柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌」(2・一九四、一九五⑦)は挽歌ではあるが殯宮のそれではなく、いわば私的な弔慰の歌として親しく「献」ぜられたのであろう。その言語詞章が、泊瀬部皇女

(あるいは忍坂部皇子をも含んで)の心情の代作的な表現であることもそのことを暗示する。内命婦石川の「為遣水主内親王風雪作歌奉献」(20・四四三九左注⑧)とあるのも、病に臥す内親王への親愛の情感に支えられ、また石川と(元正)天皇との親近性も重なるのであろう。いわば「献」とある歌は相互の親愛感の上になりたつ敬愛の心情を基底にもち、素材を「風流」につつまこんで歌われる交歓の歌であつたということが出来るであろう。

「無心所著歌」(16・三八三八、三八三九⑨)は舍人親王に「献上」されたものである。「或有作無所由之歌者、賜以錢帛」と懸賞がかけられ、「献上」された歌に「所募物錢二千文」が給されたのである。それらのことについて澤瀉博士が

……意味の無い歌のやうであるが、ただ無意味な歌でなく、部分部分をとれば関係がありさうで、その實、意表をつきつきとついで行く歌でないか、と橋本君は云はれる。その意表のつき方に面白さがあるところに懸賞の價値があるといふ事にならう。

と述べておられるところであり、「男女の問答歌のやうにした作者の技巧」に面白さを求めておられるのであるが、「なほ考ふべきであらう」としておられるのである。これらの歌が、概して言えは書かれた歌を目で読むのではなく、声に出して歌われたものを聞くというのが實際であつたことも考えてよいのではないだろうか。卷十六の題詞・左注等にもみえるところでも、「裁歌口母」(三八〇四題)や「不肯宴楽 於是前采女 風流娘子 左手捧扇右手持水 擊之王膝而詠此歌 尔乃王意解 樂飲終日」(三八〇七左注)があり、口に歌うことや「宴楽」の様子がみえ、その「風流娘子」の所作と歌とによって「樂飲終日」であつたことがみえる。「墨江之小集樂」(三八〇八)の「野遊」も同様に考えてよいであろう。

・穂積親王宴飲之日、酒酣之時、好訥斯歌、以為恒賞也（三八一六左注）

・河村王宴居之時、彈琴而即先誦此歌、以為常行也（三八一八左注）

・小鯛王宴居之日、取琴登時必先吟詠此歌也（三八二〇左注）

・尔乃婦人作此戲歌、專輒吟詠也（三八三五左注）⁽²⁴⁾

・多能歌作之芸也 …… 饗宴 …… 諸人酒酣歌、駱駝 ……（三八三七左注）

などともあって、その後この「無心所著歌」がみえるのである。また「高声吟詠此歌」（三八五七左注）、「聊作此歌口吟為喻也」（三八七八左注）などもあり、題詞・左注等に「口吟」などの説明はなくても、「乞食者詠」（三八八五、三八八六）などのように、言語詞章のみならず劇的所作も融合していたであろうものが認められるのである。こういう点からすれば「無心所著歌」もまたその系列のものであると考えるよいであろう。

その上に、短歌の形式が長歌形式の叙唱性 (Recitativo) に対応する詠唱 (Aria) としての位置を、ほとんど確立していたと思われる時期であることを思えば、この「無心所著歌」も単に言語詞章の続き方の面白さばかりでなく、声楽曲としての側面もまた考慮されてよいのではないかと思われるのである。「所部の百姓の能く歌ふ男女、及び侏儒・伎人」（天武紀四年）を選ぶことも既に行われ、「倡優等に禄賜ふ」（朱鳥元年）ことも既にあった。その歌う男女や倡優の実体はさだかでないにしても、前に述べたように「献」の場が親愛感や「風流」にかかわるならば、公的なハレ（序）の場のものに対して、比較的自由的な約束はあったのではないだろうか。その舞唱にあたって最大公約数的な約束はあったにしても、その範囲の中でならば舞唱者の即興性あるいは即興性が許容されたであろうし、むしろ要求されたであろう。

皆川達夫氏が西洋音楽のバロック期における歌劇について述べられたように、あれこれを借りてきてもっともらしい新しい筋を思わせる「つぎはぎオペラ」(Pasticcio) ほど極端ではないにしても、オペラがその場かぎりの楽しみのためのものであり、一切の理窟抜きで爛々と流れるなめらかな旋律美を強調する美しい歌 (Bel canto) の旋律にひたりきればよいのであり、物語の進行とか作曲者の名前などは二の次、三の次の問題であった⁽²⁵⁾ということは興味深い指摘である。「無心所著歌」の面白さは声楽曲としての美しい歌であることが要求されていたと類推することもできるのではないだろうか。「無心所著歌」が男女の間答歌のような様相を示していることも、個人的な感情表現の相聞ではなく、男であり女であるという類型的な約束に従って、男女の対応する美しい歌を意図したものであるかもしれないと思われるのである。小山内薫氏が近代のものではあるが実例をあげておられるように、聴衆を感動させるためには名人芸がありさえすればよく、台詞は掛算の九九や食堂のメニューでもよかったということも興味深い。「無心所著」「無所由」というのはそういう言語詞章であることと要求であったのかもしれない、舍人皇子はそれにかかわる歌唱技術、美しい歌の競演の主査であったのかもしれない。懸賞が「所募物銭二千文」という相当高額であったこともそれを暗示する。この歌を「献上」した「大舍人安倍朝臣子祖父」がどのような人であったのかはさだかでないが、「大舍人」であったことを思えば、このような歌唱あるいは舞唱の習練をつみえたであろうと思われるのである。

舍人皇子の周辺と、「献」とある歌の場を空想的に描いてみた。「献」は親愛な相互関係の中で敬愛の情を「風流」に表現する場のものであり、遊戯性・音楽性・芸能性などを総合的に含むものであろうということである。そして舍人皇子はそこに大きくかかわっていたの

であろう。

(三)

万葉集巻九の人麻呂歌集所出の「献舍人皇子歌」群(①②③)はどうかであろう。この献歌群が同じ箇所に配列されなかったのは、森淳司氏が要約されたように、

それはおそろく、時を異にしたり、他の何らかの事由がそこには介在してかく収められることになったのであろう。⁽¹¹⁾

といふべきであろうし、また原資料の切り継ぎがあったことも認めなければならぬであろう。そういう点からすればこの三群はそれぞれ別の時に「献」ぜられたものであるのかもしれない、あるいは人麻呂歌集または原資料に一箇所にあったとしても、巻九編纂者の意図によって切り継がれたものであるのかもしれないのである。同じく巻九所載の高橋虫麻呂歌集所出の「詠上総末珠名娘子」「詠水江浦嶋子」「詠勝鹿真間娘子」「見菟原処女墓歌」が、前二首は雑歌、後二首は挽歌として採録されていることも類推的であろう。これらが虫麻呂歌集あるいは原資料にどのような順で記載されていたかはさだかでないにしても、作者であろう虫麻呂の意図としては、「古代民俗的舞踊劇」伝説組曲「愛のかなしみ」とでもいふべき組曲を構成する四部作であったはずなのである。「献舍人皇子歌」三群も同様に考えることができるのではなからうか。巻九はもとより、人麻呂歌集あるいは原資料の記載順までも、極端にいえはどうあつても差し支へはないといえるのではなからうか。いわは舍人皇子の主題による組曲を構成する意図が、この三群の背景に認められるかどうかが問題なのである。

「献舍人皇子歌」三群は冒頭に記したとおり、第三群(9・一七七四、一七七五)④だけが相聞として採録されている。そのことも巻九編

纂者の文芸観にかかわるであろう。この歌の前にある「献弓削皇子歌」(一七七三)は一首だけであつて、「献」になお問題を残しはするが、いわゆる相聞の一首であるともみることが出来るであろう。しかしこの「献舍人皇子歌二首」は、第一首目が女の歌、第二首目がそれに応ずる男の歌の様相を示し、ある女性と舍人皇子との相聞ではない。舍人皇子以外の男女の相聞を舍人皇子に「献」じているのである。そのことは雑歌にみえる第一群(一六八三、一六八四)⑤においても同様である。第一首目は男の歌、第二首目はそれに応ずる女の歌とみてよいであろう。そういう点からみれば、前に述べた雄略と袁杼比売にかかわる伝承が、その二人に扮する舞唱者(海人語部らか)によって舞唱されたであろうことも類推的なのである。

それならば具体的にどうみることが出来るであろう。第一群第一首目の「妹が手を取りてひきよぢ」について、「序の用法にしても如何にも低俗であり、ヒキヨヂの如きは煩瑣にたへぬ句である」^(私注)などといわれるにしても、「妹が手を取る」(3・三八五)「仙柘枝歌」(の内)の場面や、「杵島が岳」(肥前国風土記逸文)の

郷間士女 提酒抱琴 毎歳春秋 携手登望 樂飲歌舞

とある場面はそのままに重ねられるであろう。続いて「ふさ手折り我がかざす」ところも、「ふさ手折」の原文「抹手折」が集中三例であり、内二例が「献舍人皇子歌」群にみえ、他の一例は

……みづ枝さす 秋のみち葉 まき持てる 小鈴もゆらに 手
弱女にわれはあれども ひきよぢて 枝もとををに 抹手折 わ
れは持ちて行く 君がかざしに、(13・三三三)

とみえるのである。こうみると婚姻にかかわって「もみち葉」を「ひきよぢて」、「ふさ手折り」「かざす」慣習が第一首目の背景となり、「花さける」春の場を詠歌する。

第二首目（一六八四）については「寓意のある歌であろうが未詳」（小学館本⁽¹⁴⁾）とあるところであるが、「いまだふふめり君待ちかてに」は「君待ちかてに」を「ふふめり」と具体化する。

……三粟の 中つ枝の ふほごもり 赤れる嬢子 いざさかば良
な（応神紀一三年）

などのように、まだ問題を含んではいるが、「野合・情交」（全注釈⁽¹⁵⁾）の意までを広くは思わせながら、求婚を待つ女の媚態がうかぶのである。

第二群第一首目（一七〇四）は、「採手折」三例の中の一例を含んでいる。この例が枕詞であるにしても、「この二群の献歌が意図的な対応をもつことを示す」（新潮本⁽¹⁶⁾）といわれていることは動かし難いであろう。古く狭井川の雲や木の葉のさやぎを「風吹かむと」する前兆（記神武）として、事件の起ることを諷する物語歌も歌われていた。そういうことを思えば、「多武の山霧」深きあたり、「細川の瀬に」さわぐ波とともに、「ふさ手折り」かざす期待と不安とに胸さわぎしたのであろう。

第二首目（一七〇五）は、その「さわける」思いに耐えて、「実際になる時をかた待つ」のである。「恋の成就をこめた比喩の歌か」（小学館本等）などといわれるとおりであろう。

第三群第一首目（一七七四）は女の歌（新潮本）であろうが、あるいは男の歌（注釈）かという疑問を残しつつも、「たらちねの母の命」の許しが近いこと、あるいは既に許されているであろう喜びを歌っていることにちがいはない。そのゆえにこそ第二首目（一七七五）は「我妹子が家のかなとに近づきにけり」と、念いかなって逢える歓喜に胸はずむのである。

その後その結婚がどうなったかは何とも歌われてはいない。しかし

そのことは万葉集巻頭歌（1・1、雄略）の場合とも同様であろう。神武の皇后選定にかかわる伝承の構成も類推的に思われる。求婚と婚約の成立については歌謡を残しながら、最も重要な結婚については地の文にわずかに「天皇幸行其伊須気余理比売許、一宿御寢坐也」（記神武）と記すにとどまるのである。いわばその部分は聖なる秘儀なのであった。巻頭歌の場合も同様に考えてよいであろう。そして古事記はその後、

芦原のしけしき小屋に菅盃いやさや敷きて我が二人寝し（神武）と結婚の喜びを披露する歌を記すのである。

そのようにみると、巻九の人麻呂歌集所出歌としては作者名を明記して異例である「舍人皇子御歌一首」（一七〇六④）が、第二群に続いて採録されていることも意味をもっているように思われる。「ぬばたまの夜霧」が「ふさ手折り多武の山霧」に応じて歌われたであろうことも指摘（新潮本）されているところである。「衣手の高屋」は二人の共飲の場を歌った神武の場合と類型的であり、「衣手の」が枕詞であるにしても、「娘子を得て作」ったとある笠金村の「しきたへの衣手交へて己妻とたのめる今夜」（4・五四六）などあるような歓喜の情景として「たなびく」「夜霧」に深々と包まれたであろうことを暗示する。「高屋」が地名であるのか「高」「屋」であるのかあいまいではあるが、地名であるにしてもほめ詞としての「高」の意は含み得るであろう。この歌が「献」歌ではなく「舍人皇子御歌」とされたのは、「献舍人御子歌」群の意味を完結させるものとして、「献」ずる舞唱者によって歌われるにしても「舍人皇子御歌」として歌われるべき歌であったことを示すのであろう。婚約成立までが伊須気余理比売と大久米命によって展開され、結婚の披露が神武によって歌われた高佐士野の伝承や、雄略と袁杼比売にかかわる伝承とも類推的に思われ

るのである。

要約すれば、第一群が春の野遊などの季節祭式、成年式の場を背景とする求婚の舞唱曲であり、第二群は求婚にかかわる忍耐と問題の解決、第三群における婚約の成立という構成が「献舍人皇子歌」群の背景となる意図であったのであろう。その後、言語詞章には明記されない結婚の最も重要な場面は劇的所作によって、聖なる秘儀の芸能として象徴的に舞われたのであろう。そして「舍人皇子御歌」が「衣手」のたなびくかとも見える共舞の舞唱 (Grand pas de deux) として結婚の歓喜をみせたのであろう。

これらが天皇にかかわるものでなく、舍人皇子であるところに「献」の示す親近性をみることもできるであろう。いわば日常性の身近な婚姻の規範としての秩序の意味も含まれていたであろう。そのゆえにこそ前に述べたような意味を持つ舍人皇子に「献」せられるべきなのであった。これら三群と皇子の歌は、舍人皇子の主題による祝福の舞唱組曲として、万葉の若き人々に親しまれつつ人麻呂歌集に筆録されたに違いないと思われるのである。しかもなおそれだけではなく、第三群が相聞に採録されたように、巻九編纂者の文芸観に適応する文芸性をも含むところに、万葉集の文芸的な場の歌への過程を認めることもできると思うのである。

【四】

なおいくらか付加的にいえば、異例とみえる「舍人皇子御歌」という題は、「献舍人皇子歌」群が舞唱する場所 (Orchestra) のものであり、皇子の歌もまたそこで舞唱されたはずなのであるが、皇子は「献」せられる立場であり観る場所 (Theatre) にいるのであって、皇子の歌を「献」としたのは、舍人皇子の主題による舞唱組曲の構

成意図があいまいになってしまふことによるのであろう。そういう事情は当時自明であり、異例ではなかったであろう。

以上あらあらと巻九の人麻呂歌集にみえる「献舍人皇子歌」群と「舍人皇子御歌」をめぐるところである。人麻呂歌集に筆録される前段階の、言語詞章と劇的所作の融合した音楽性をも含む芸能として整序された、通過儀礼の一環としての季節祭式・成年式の様相が、舍人皇子の主題による祝福の舞唱組曲として再構成されたのではないかと思つたのである。それが人麻呂歌集に筆録されたことによって、言語詞章を主とする歌として、巻九編纂者の文芸観によって万葉集に採録されるに至ったのであろう。その過程を逆にさかのぼって、これらの歌の背景となった人麻呂歌集あるいは原資料の構成意図について、まさに恣意的に空想をたくましくしたにとどまる。御叱正を乞う次第である。

注

- ① 拙稿「藤原宮讃歌と志貴皇子」(『芸能史研究』四七号) 二七頁等
- ② 小島憲之「上代日本文学と中国文学」中、一〇七〇頁
- ③ 澤瀉久孝「万葉集注釋」巻第四、七二一の「考」
- ④ 拙稿「雄略と袁杼比売(古事記)の伝承」(国崎望久太郎博士古稀記念『日本文学の重層性』) 四一頁
- ⑤ 本田義徳「万葉小記」(『国語・国文』一四卷三号) 三頁
- ⑥ 高安因世「万葉の歌をたずねて」三二頁
- ⑦ 澤瀉久孝「万葉集注釋」巻第十六、「題詞」、「考」
- ⑧ 拙稿「万葉集における『長歌+短歌』の様式」(『奈良大学紀要』四号) 一五頁
- ⑨ 皆川達夫「バロック音楽」九四頁等
- ⑩ 小山内薫「芝居入門」

⑪ 森淳司「巻九人麻呂歌集抄」（『万葉集を学ぶ』五）一五〇頁
 拙稿「高橋虫麻呂伝説歌小考」（『大阪城南女子短期大学研究紀要』七）二二頁

⑫ 土屋文明「萬葉集私注」一六八三「作者及作意」

⑬ 小島憲之木下正俊佐竹昭広「萬葉集」（『日本古典文学全集』）頭注。前項「私注」等も同様。

⑭ 土橋寛「古代歌謡全注釈」日本書紀編一三七頁

⑮ 青木生子 井手至 伊藤博 清水克彦 橋本四郎「萬葉集」（『新潮日本古典集成』）頭注

⑯ 土橋寛「古代歌謡全注釈」古事記編九九頁

⑰ 拙稿「高佐士野の伝承覚え書き」（『奈良大学紀要』六号）八頁等

⑱ 拙稿「万葉集巻頭歌の芸術的側面」（『阪倉篤義博士還暦記念「論集日本文学・日本語」上代』五九頁

(56・9・29)

付

。歌の訓釈にいくらか小異があり問題の残るところもあるが、主旨に大きく影響するとは思われないので、訓は掲書房本によった。

。「献」の例を⑥、⑧の二十一例としたが、大伴坂上郎女作と左注にある6・一〇二八の題詞に「献上」、同左注に「献歌」とある例が脱漏している。それを追加して訂正すべきであるが、大体のところは変動がないので、いまはこのことを記して御寛容を乞う。

。小稿は、真下厚氏の「人麻呂歌集『献舍人皇子歌二首』考」の発表（『日本文学談話会』55・11・15、後に『立命館文学』昭和56年9・10月号所載）についての質疑討論の時、芸術的側面にかかわる思いつきとして述べたところを、とりとめもなく記したものであることを付記する。

Songs dedicated to, and a song by, Toneri-no-miko

(Manyōshū Vol. 9)

Yoshinaga HONDA

Summary

This report is on one aspect of the performing arts about some songs dedicated to, and a song, by Toneri-no-miko.

First of all I have examined the songs in which the word 'dedication, 献 is used in the titles or notes.

In consequence I have confirmed that two things are needed in the scenes of the songs which contain '献' That is, one is a feeling of intimacy between the author and the person who is dedicated the song. And the other is a sensation of intimacy, which is sensuously well-polished.

In the next place, my explanation is that the Imperial prince possessed a kind of performing arts. Also the song dedicated to the prince is well-ordered in view of the performing arts. The arts are about the subject of a coming-of-age or initiation ceremony, and I have considered that the songs dedicated to, and the song by the prince are not only of the ceremony, but also have a value of lyrics implying the performing arts by re-constructing them.